

カトリック仙台司教区・カリタスジャパン

東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

塩竈市の浦戸諸島の中には、桂島、野々島、朴島、寒風沢島の4島がある。その中でも、一番支援の手が行き届いていないところが、寒風沢島だと言われている。今回は、その訪問記である。

独り居のお年寄りを訪ねて

— 塩竈市・寒風沢 —

塩釜港から船で50分。たくさんの島々を通り抜けてやっとたどり着いた寒風沢。だが、どこにも棧橋らしきものが見えない。無くなってしまったのだ。船は比較的崩れていない岸壁を選ぶようにして接岸した。下船したのは佐々木弘子さんと私だけだった。

見渡す限り、がれきの山と茶褐色の平地。津波が来ても逃げる所がない。一瞬、恐怖でたじろいだ。人影はなく、大きな工場らしき建物が一軒、すべてを剥ぎ取られて廃墟と化していた。冠水した道路は未だ行く先を失ったままだ。2011年12月6日のこと、大震災の日から9カ月もたとうとしているのに、まだ、島のいたる所に津波襲来の生々しい痕跡が残されていた。

私たちは避難グッズと食料品をリュックサックに詰め込んで、無為無策のまま、この島にやって来た。まるで誰かに呼ばれでもしたかのように来てしまった。「被災者がたくさんいるのに、寒風沢にはボラ

ンティアが来ていない」という話を小耳に挟んだ、その時に決めたことなのだ。

海沿いの空き地を途方に暮れて歩いていると、頬被りをして長靴をはいた女の人が、痩せ犬を連れて山道を駆け下りて来るのが見えた。私

たちには目もくれず、足早に通り過ぎて行こうとするその人を、とっさに呼び止めた。

「大変でしたね」と声をかけた私たちに、

「なんも残ってないさ。津波に流されて病院に運ばれて、3カ月してここに帰って来たら、鍬1本、残されてないんだよ。誰がしたんだか。何もかもすっかり片付けられてしまって、このありさまだもの。私のうちはこの松の木の植わってる所からあそこまで、ずっと広がったんだよ。庭には氏神さんも祭られていたのに。見てみさいん、そこん所だよ」。

でも何も見えなかった。その人は険しい表情のまま、まったくもう腹立たしくてしょうがないといった口調で、津波の体験を叫ぶようにまくし立てた。無念さがピンピン伝わってきた。私たちは言葉を失い、ただ相づちを打つだけで精いっぱいだった。

山の上の仮設住宅に、島の世話役をしている副区長のSさんが住んでいることを教えられ、そこを目指した。たどり着いた瞬間、強い地震が来た。目の前の、崖の上に建つ廃校がガチャガチャと大きな音を立てて揺れ出した。棧橋に降り立った時の恐怖心にまたもや襲われた。

仮設住宅は無人かと思われるほど深閑としていたが、幸いSさん夫妻は家に居られた。「話を聞きましょう」と言われて、隣の集会室に案内された。紹介者もなく、なんの資格も持ち合わせず、突然やって来た私たちは、決して怪しい人間ではないことを伝えたいあまり、つい必死になり過ぎて笑われもした。それでも、私たちにさせていただけることがあるなら、何でもさせてほしいという思いだけは、なんとか伝えることができた。

Sさんは、寒風沢には津波をかぶった家を修理して、今もそこに残って独り暮らしをされている高齢者が数人いるという、島の実情を話された。その上で、「そういう所

を訪ねて行って、年寄りの話を聞くというのはどうだろうか」と言われた。さらに、「それでよかったですら、また来るの待ってますよ。今度来た時は私も一緒に行って何軒か紹介するから、日にちが決まったら連絡ください」と言われた。このSさんの提案は私たちがひそかに願っていたことでもあったので、心からSさんに感謝し、翌月から私たちは、二人三脚で寒風沢通いを始めることにした。

1月から月1回のペースで寒風沢を訪問している。いつも事前にSさんに連絡し、打ち合せをしてから島に向かう。船が着くと、棧橋にはSさんの姿があり、その日に訪ねる家を2,3軒、案内して下さる。お年寄りに私たちを紹介するとき、Sさんはいつもこう言われる。

「喋りたいことがあったら、なんでもこの人たちに聞いてもらいたいよ」。

どのような事情にある家なのか、何も知らされないまま訪問するので緊張するが、どこの家からも温かく迎え入れられ、感謝のひと言に尽きる。持参したお弁当を広げて話を聴いたりしているうちに、瞬く間に時間が過ぎて行く。次回の来訪を約束して、次の家に向かう。そこでは、「次の船で帰ればいいさ」とか「泊まっていてもいいんだよ」と言ってくれるのに応えられず、申し訳ない気持ちを抱えたまま、帰路、棧橋に向かう。数少ない運航便が恨めしい。

家を失くした人に比べれば、残った家でそのまま暮らせるのだからその人は恵まれている、という話には到底ならない。

ある人は、「周りの家がみんな解体されて、近くに住む人はみんないなくなってしまった。夜、闇の中で海鳴りが響いていると、こわくて一晩中眠ることもできない」と言い、

ある人は、「前から一人暮らしだったんだけど、あんな怖い思いしたから、また地震が来たらどうしよう、もう逃げられないと思ってしまう。一人では外を歩くこともできないし」と言い、

ある人は、「津波が来たとき、私は山に逃げてひと晩中、木にしがみついていたから助かった。でも、隣の夫婦は子どもを残して亡くなった。私のようなもんが生き残ったってな…」と言う。

80歳を越えた方々が、ため息まじりに話す言葉なのだ。

生き残っても、住む家があっても、心の中に投げこまれた鉛のような苦しみは計り知れない。それを癒すには、どれほどの時間が必要なのだろう。

大津波によって島の姿形も暮らしの形態も大きく様変わりしてしまった寒風沢。そこに取り残された感じで住んでおられるお年寄りは、一見、頼りなげに見える。ところが一転、過ぎし日の、島での暮らしぶりを語れば、実に色どり豊かで、しかもスケールが大きい。言葉の端々から、生への底力のようなものが伝わってくる。ここで私たちがしていることと言えば、話を聴きながら、その方の道程と一緒に反復し、生きてこられた証しを受け止めることだけだ。今では、私自身の生き方を少しは骨太なものにさせていただけるかな、と思うこの頃だ。

